

# 門前町に生きる

— 過去・現在・未来 —

## 第11回 薪能を支える門前町の謡曲文化

毎年5月の第2土曜日には、成田山公園の森に隣接して建つ光明堂を舞台にして、観世流梅若一門による薪能が行われる。初夏の夜、薪の炎に照らされて闇に浮かび上がる光明堂と能の舞はことのほか美しく、600席はいつも満席の盛況である。門前町のイベントは参詣客や観光客向けで、参道商店の人々が見物客になることはあまりないが、薪能だけは例外で、旦那衆やおかみさん達の姿も多く見受けられる。門前町にゆかりの古典芸能といえば市川團十郎の歌舞伎が有名だが、能楽は町の旦那衆が100年以上にわたって自ら習い育ててきた、まさに門前町に生きる文化なのである。

門前の旦那衆がいつごろから謡を始めたのか定かな記録は残っていない。『成田町誌』によれば、明治35年に町の好事家が集まって、瓢声会という謡曲の会が結成されたとある。鉄道唱歌の作詞で有名な大和田健樹は、明治中期にしばしば成田を訪れていたが、この謡曲会の存在を知るや飛び入りで参加し、本も見ずに『羽衣』を朗々と歌い上げたという。それに感服した会員がその場で全員大和田の弟子になり、会は活況を呈していった。大和田は弟子も逃げ出すほど熱心に指導を行い、逗留先の仲町の大野屋では、明治42年、ついに庭の一角に能舞台を作り、旦那衆による演能会も開かれるようになった。

大和田は大野屋能舞台のこけら落として能を演じるも、その



明治42年6月20日、大野屋能舞台新築の披露で舞う大和田健樹さん(久保田きくいさん提供)



光明堂前で行われた薪能(成田山新勝寺提供)

年の秋に病を得て、翌明治43年に54歳の若さで亡くなった。しかし瓢声会は関川藤右衛門という次代の指導者を得てさらに規模を拡大していく。昭和初期に発行された瓢声会のガリ版刷りの会報によれば、毎週に謡と仕舞の稽古日があり、そのほかに毎月の例会、さらに四季の年大会があった。稽古は平日に、例会や大会は日曜日に行っており、当時の旦那衆がいかにか有閑人であったかがうかがい知れる。夏には朝の7時から夜中まで、謡曲を36曲打っ通して歌う歌仙会という例会を行った。注意書きには「浴衣2枚、手ぬぐい、さる又の着替えを持参」とある。クーラーも網戸もない時代、会員が一堂に会し腹の底から声を出して吟ずる。吹き出す汗や肌にまとわりつく蚊をものともせず、浴衣と下着を換えながら歌い通すのである。番組を見ると、大野屋、駿河屋、飯田屋、魚田丸家、坂本旅館、扇屋、田中屋、浜屋などの旅館の旦那衆、菊屋、木内一粒丸、新勝寺出入商の鈴木畳屋、高橋時計屋、医師、歯科医師などが名を連ねている。

門前町の旅館が栄えた明治期から戦争前まで、旦那衆は豊かな経済力と有り余る時間を持ち、生活を憂うことなく趣味や社会奉仕に熱心に取り組んだ。時代は移り、人々にその余裕はなくなりましたが、門前町で開花した能楽の伝統は現在の薪能を生み支えてきた。瓢声会はその後、観世流梅若一門との出会いを通し、昭和49年に梅若宗家より梅の一字をいただいて梅成会となり、現在では成田以外の会員も擁して活動を続け、薪能では前座を務めて後援している。ことし(平成27年)の演目は、明治36年大和田健樹作、新勝寺の縁起を記した『碓引き』で、人間国宝の梅若玄祥がシテを演じた。門前町に生きる人々の能楽への関心と実践が次の100年を支える。一人でも多くの若者が、門前町の伝統を引き継ぐ謡曲会の門を叩いてくれることを、関係者は切に願っている。(久保田 滋子)

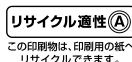
## 編集後記

ことしも6月29日から7月5日に姉妹都市アメリカ・サンブルーノ市から中学生訪問団が成田市にやってきます。滞在中は、一般家庭にホームステイをしながら、市内施設の見学や小中学校を訪問し、日本の生活や文化を体験します。日本人は外国人との交流を苦手とする方が多いといわれます。私もその一人。国際空港のある成田市では日ごろから多くの外国人を見掛けます。これを機会に積極的に外国人と触れ合えればと思います。

平成27年6月15日号 No.1293

成田市のホームページ

<http://www.city.narita.chiba.jp>



広報なりたは、グリーン購入法に基づく基本方針の判断基準を満たす用紙、誰にでも読みやすいUD(ユニバーサルデザイン)フォントを使用しています。